

間展再考

—— 戦後日本美術による伝統美学の脱構築とキッチュ化

松井 茂 (情報科学芸術大学院大学)

建築家の磯崎新(1931~2022年)は、Festival d'Automne à Parisの依頼に応じて、1978年に「間展 日本の時間/空間 Exposition MA Espace-Temps au Japon」(以下間展)をキュレーションし、国際的な注目を集めた。1981年までに、当初は予定になかったアメリカ、スウェーデン、フィンランド(6ヶ所)を巡回する。間展については、クロード・レヴィ=ストロース、ロラン・バルト、アラン・ジュフロワによるテキスト、ジャック・デリダの発言などが知られる。後年、磯崎は、デリダがプラトンの『ティマイオス』から展開した「コーラ」に関係づけ、「間」を論じ続け、2019年のプリツカー賞受賞理由のひとつにもこれが挙がる。

間展の意義は、後述するようにポストモダニズムの実践としてキュレーションが評価されたことだ。これを契機に「間」の言説は、伝統美学の解釈として展開する。しかしながら多くの場合、間展の評価と「間」の言説は同一視される。「間 20年後の帰還展」(東京藝術大学大学美術館、2000年)に早くその傾向が見出され、近年の「Art and the Space In-Between」(イラン、2022~24年)、最新の回顧展「Arata Isozaki: In Formation」(Power Station of Art、2023~24年)でもこれは繰り返され、当初の間展の意義は不明確となっている。

本発表では、磯崎の国際的な評価の起点となった間展が、どのような展覧会であったのかを明らかにし、その意義を検討、分析し、その価値を明らかにすることを目的とする。

間展は、現身、道行、数寄、闇、神籬、橋、移、寂、遊の9つの部屋で構成された。ジョセフ・コースの《One and Three Chairs》を参照し、各部屋にはSubject、Object、Imageが並置される。Subjectとして、磯崎による伝統美学に関する説明文が掲示。Objectとして、倉俣史朗、宮脇愛子、高松次郎らの現代美術、あるいは茶室、能舞台、伊勢神宮など伝統的な建造物の模型を設置。Imageには、篠山紀信、山田脩二らの写真、磯崎による廃墟のコラージュ、浮世絵などを展示した。磯崎は、時空間の概念を9つに分割し、それぞれの意味を3つの項目を相互参照し、展覧会の形式で戦後日本美術による伝統美学の脱構築とキッチュ化をはかった。脱構築とキッチュ化の背景には、磯崎が原風景として捉える、1945年8月15日という時空間が予感される。磯崎が晩年に監修した「12×5=60」(ワタリウム美術館、2014~2015年)、「磯崎新の謎展」(大分市美術館、2019年)での間展の再現展示の意義にも検討、分析をし、本発表を間展再考の契機としたい。